

なにが、どううちゅうことない

「今な、駅におるんや——」

十二年前の春のこと。

突然、父から電話がかかってきた。聞き慣れた声。実家は大阪で、わたしは東京の国分寺に暮らしている。

「蕎麦食いに行つたら、思てな。新幹線、乗つてきた」
おどろいて、自転車で駅まで迎えに行つた。

もともと気ままでせっかち、ひとりでもふらりと行動する父だった。食べるのが好きで、東京に来ると必ず行く気に入つた蕎麦屋があつた。だからつて。平日の昼、突然、わざわざ新幹線で？ 何かあつたんやろか。

心配して駅に行つたら、近所に住んでる人みたいに「おう」と笑つていた。夫に連絡したら、早めに帰つてきてくれたので、三人でお蕎麦を食べにいった。

「なにが、どううちゅうことない」

話の途中、父は大きい声で何回も言つた。その頃の父の口癖だった。声が大きいのはいつものことで、普通の会話でも、遠くで聞いていた人に「ケンカでもしてるのかと思つた」とよく笑われていた。人と話すのが好きな父だが、話は下手くそだった。だからか、仕事があまくいかない時も「なにが、どううちゅうことない」。友人が亡くなった時にも「なにが、どううちゅうことない」。誰かに迷惑かけてしまった時も、かけられた時も——

「なにが、どううちゅうことない」。

関西弁だが、なんというか、「何も、たいした問題はない。無事に生きてるんやから問題無し」というような感じなのだけど、「それ以上言うな」と制してるように思えたり、何でもかんでも、その言葉で話を終わらせんといつて。と突つ込みたい時もあつた。

その日も、いつもの調子、と聞いていたら、「なにが、どううちゅうことない」と言つたそのあと、一瞬、父が涙ぐんだ。そして、もう一度すぐに「なにが、どううちゅうことない」と、煙に巻いた。わたしは、はつとしたが、きけなかつた。その数ヶ月後、父はがんが見つかり、あつという間、ひと月で亡くなつた。

死ぬことですら「なにが、どううちゅうことない」と天国から言つてる気がしたほど、あつけなかつた。

あの時、父は病気のことなど知らなかつた。あの涙は何だつたのか。わたしはきかなくて良かったと思う。

すべてはたいした問題ではなく、あの日、父はわたしに会いたかつたのだ。それで、ぜんぶだ。

「なにが、どううちゅうことない」

父がいなくなつてから、こだまのようにこの言葉が聞こえる時がある。たとえば、今いる場所に立ちすくむような時、耳慣れた声で。聞こえる。

父の、どこか勝手に思えたこの言葉が、今は自分をささえる、おまじないのようになつていく。



1965年、大阪府生まれ。絵本作家、漫画家。主な著書に「ことばのかたち」（講談社）、「あかちゃんがわらうから」（ブロンズ新社）、「ひらがな暦」「幸福な質問」「モモ」（新潮社）、「365日のスプーン」「きれいな色とことば」（大和書房）、「てのひら童話1〜3」（角川書店）、「おふろでストロー」（福音館書店）など。エッセイや翻訳、子どもの歌の作詞も手がける。